

弘前大学医学部 保健学科 検査技術科学専攻

藤岡 美幸*

I. 大学の沿革

弘前大学医学部保健学科検査技術科学専攻は、目まぐるしく進歩する医療技術に適應する高度な技術や教養を身につけた人材育成の要望に応えるべく、その名称、就業年限、定員等を変革し、これまでにたくさんの卒業生を輩出してきました。

1967年：弘前大学医学部附属衛生検査技師学校(就業年限2年)

1975年：弘前大学医学部附属臨床検査技師学校(就業年限3年)

1976年：国立弘前大学医療技術短期大学部設置(就業年限3年)

2000年：国立弘前大学医学部保健学科設立(就業年限4年)

2004年：国立大学法人弘前大学医学部保健学科設立

2005年：国立大学法人弘前大学大学院医学系研究科保健学専攻(修士課程)設置

2007年：国立大学法人弘前大学大学院保健学研究科(博士課程)設置

弘前大学医学部保健学科の使命は、保健学における適切で高度な専門教育を提供し、健康の質を改善するとともに、国民の健康と福祉の増進に寄与することです。現在、保健学科は検査技術科学専攻、放射線技術科学専攻、看護学専攻、理学療法学専攻、作業療法学専攻の5専攻を有し、我が国でも最大規模の医療専門職養成機関です。弘前大学は2つのキャンパスがありますが、保健学科

は本町キャンパスに位置し、約800人の学生が所属しています(図1、写真1)。

検査技術科学専攻の専任教員は教授6名、准教授2名、講師6名、助教4名、助手1名の総員19名です。このうち医師免許保有は3名、薬剤師と臨床検査技師の免許保有は1名、臨床検査技師免許保有は10名おり、また細胞検査士や超音波検査士の認定資格を有する教員も3名含まれません。



図1 弘前大学キャンパスマップ

*保健学科 検査技術科学専攻 mfujioka@hirosaki-u.ac.jp



写真1 保健学科外観

II. 教育の特色

当専攻は遺伝子関連領域をはじめとする高度に専門化した医学検査に対応できる知識と技術を備え、問題解決に対する判断力および応用力、創造的知性を有する人間性豊かな臨床検査技師の養成を目指しています。さらに総合科学としての学問を追究する研究者の育成、臨床検査技師教育者の養成、チーム医療の一員としての協調性を備えた国際的に貢献できる人材の育成に努めています。

1. カリキュラムの概要

授業科目は、1)生命現象を総合的に理解し、医学・医療における検査の基礎を学習する教育教養科目、専門共通科目および専門基礎科目、2)検査の知識・技術を習得し、臨床検査技師に必要な実践力を養う専門科目、3)大学院を念頭に置き、学生の関心に応じて学習を深める卒業研究、以上の3つから構成されます。教養教育科目は1~4年次、専門共通科目、専門基礎科目および専門科目の履修は1年次から始まります。臨地実習は3年次後期に主に医学部附属病院で行いますが、そのためには所定の科目の単位を取得している必要があります。卒業研究は4年次に行い、研究課題の選定、文献検索、研究計画の立案と実験、抄録作成、スライド作成、口頭発表、および研究論文の

作成を学びます。

また、本専攻は細胞検査士養成課程を併設しており、同課程を修了することにより臨床検査技師と細胞検査士のダブルライセンスの取得が可能です(図2)。

3. 卒業までに要する単位

教養教育科目 34 単位、専門科目 89 単位(専門共通、専門基礎、臨地実習を含んだ必修 86 単位および選択 3 単位)、卒業研究 6 単位(必修 6 単位)が卒業までに必要な単位です。専門共通科目は保健学科 5 専攻に共通して開講される医療技術者の共通知識として学習することが必要な科目であり、必修 9 科目、選択 8 科目です。また専門基礎科目は専門科目の学習前に持っておきたい医学基礎知識であり、専門的な臨床検査技術を理解するために開講されている科目です。専門基礎科目は必修 13 科目、選択 1 科目が開講されています。さらに臨床検査技師に必要な専門科目として、必修 39 科目が開講されています。

細胞診断士養成コースの学生は上記に加え、7 科目が開講されています。当専攻では食品管理士(民間資格)のための科目も開講されており、健康食品学、健康食品法規を受講することで受験資格を得ることができます。

卒業研究は、講義、実験・実習および演習で得

1年次		2年次		3年次		4年次	
前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
21世紀教育科目(教養科目)							
専門共通科目				専門共通科目	専門共通科目		
専門基礎科目				専門基礎科目			
専門科目							
臨地実習							
細胞検査士養成課程							
卒業研究							

図2 教育課程



写真2 細胞検査士養成課程

た知識や技術をもとに、これらの知識を併せて活用する能力を習得し、医学的な総合力を身につけるものです。卒業研究においては、1) 臨床検査およびその融合領域における専門分野の知識、2) 研究の立案と企画の修得、3) 研究計画と研究管理方法の習得、4) 研究データから傾向や法則を見いだした医学的評価方法の習得、5) 卒業研究を通じた発表技術および論文作成技術の習得など、これらを通じて、卒業後の臨床現場で必要となる学会発表等のプレゼンテーション能力も培います。

III. 最近の動向

平成20年11月、弘前大学医学部保健学科に細胞検査士養成課程を設置することが日本臨床細胞学会から許可され、翌平成21年4月から開講しています。

4年制大学における細胞検査士養成校は弘前大学が7校目となります。現在細胞検査士の数は、

退職者数が新規取得者数を上回ることにより減少傾向にあります。そのため、東北・北海道地区唯一の養成校として大きく期待が寄せられています。細胞診断はスクリーニングのみならず記述的診断や質的診断が求められ、より高度で専門的な技術となっています。本学における細胞検査士養成課程は、検査技術科学専攻において細胞検査士を希望する学生を対象に3年次より開講し、細胞診断学講義と演習の試験に合格した者が細胞診断学実習に進むことができます(写真2)。近年、この細胞検査士養成課程を希望して本専攻を志願する学生が非常に多くなっています。

IV. 就職・進学

1. 就職について

本専攻では就職を希望した学生のほとんどが東北・北海道地区の医療機関や医療関連企業に就職しており、就職率は100%です。残念ながら国家

試験に合格できなかった学生は内定が取り消しとなるため、その後のフォローも行っています。多くの学生は4年次の春から就職活動を始めますが、近年は臨床検査技師の募集も多く、また採用試験も早期に行われるため、年内にはほとんどの学生の就職が内定しています。

学生は就職活動に必要な履歴書作成支援や業界分析、面接指導を通じて、4年次までにそのスキルを身につけることができるようにしています。本専攻では弘前大学就職支援センターと連携し、学生の就職活動をサポートしております。また本学の卒業生を招いての就職説明会、県内外の医療機関への見学などを実施し、就職に必要な情報収集活動のサポートにも力を入れています。本校は医学部保健学科としての歴史は2000年からですが、前身の医療技術短期大学部、臨床検査技師学校、衛生検査技師学校を含めると50年以上にわたる長い歴史を有しており、多くの卒業生が北海道・東北・関東方面をはじめとした日本全国の医療機関の第一線で活躍しています。

本専攻オリジナルの支援として、これまで採用実績のある医療機関や協力医療機関にご協力いただき、長期休業期間に職場見学や短期インターシップなど臨床現場体験活動を支援し、就職後のミスマッチによる離職や転職が生じないように配慮しています。

2. 進学について

本学では生命科学の飛躍的発展に伴う医療の高度・先進化、急速な少子・高齢化の進展に伴う社

会・疾病構造の変化、健康保持・増進に対する国民の意識の向上など、保健医療を取り巻く環境に対応できる高度な医療技術者の養成を行うべく平成17年4月に医学系研究科保健学専攻(修士課程)、平成19年4月に保健学研究科保健学専攻(博士課程)を設置しました。高度な臨床検査技術の研究開発、マネジメント技術など単に現在の医療技術を活用できるだけではなく、新たな技術や知識を創出できる人材育成を行っています。また原子力問題に 대응べく、放射線被ばく事故に対応できる人材育成のための「被ばく医療コース」が設定されています。さらに本学には学部からの進学者だけでなく、社会人入学制度を活用した多くの既卒者もまた日々進歩する高度な医療技術や分析技術を身につけるために「学び直し」入学をしています。医療従事者は常に最新の医学知識を有して業務を行うことが求められます。本学では職能団体である日本臨床衛生検査技師会とも連携し、社会人再教育にも力を入れています。

おわりに

科学の進歩は目覚ましく、医学・医療技術も例外ではありません。私たち教員も個々のスキルアップを怠ることなく、教員一丸となって日々努力していかなければなりません。その上で、地域医療はもちろん世界も見据えた医療貢献ができるグローバルな人材の育成に努めていきたいと考えています。